

# 高岡の図書館

第108号

2022. 9. 1

編集・発行 高岡市立中央図書館（〒933-0023 富山県高岡市末広町1-7） TEL 0766 (20) 1818 FAX 0766 (20) 1819

## 本との出会いに想う

高岡市立中央図書館 館長 岡 はるみ

3年ぶりで「14歳の挑戦」が実施され、体操服にエプロン姿の中学生が図書館で活動しています。図書館での活動を希望した理由を聞いてみると、「小さい頃から祖母と図書館へ行くのが楽しみだったから。」という言葉が返ってきました。中央図書館には児童書が約68,000冊あり、藤子・F・不二雄氏のコーナーが常設されています。また、ミニコンサートができるくらいの広さの「おはなしの部屋」もあり、ここでは毎日午前11時から、土曜日には午後2時から読み聞かせや紙芝居、人形劇などが催されています。お話を聞きながら登場人物と一緒に驚いたり喜んだりする子供たちの姿や、お子さんに声をかけながら一緒に物語の世界に浸っておられる保護者の方の姿等が見られます。

私と本との出会いは幼稚園でした。日頃から父が本を読んでいる姿を見ていたので、本を読むことに興味があったのか、絵本を何冊か手にしていたら、「本が好きなの。えらいね。」とほめられたことがうれしくて、より一層本を手にすることが増えました。何気ない一言が人生を豊かに変えてくれるものです。

小学校では、図書委員になったことをきっかけに、図書室の本を端から端まで全部読んでみようとして手当たり次第に読書をしました。小説はもちろん日本の昔話や世界の神話、伝記、推理小説やノンフィクション等々、とにかく本の世界に入り込むことが楽しくて読み続けました。今思えば、いろんなジャンルの本を読み漁っていたことがその後の自分をつくっていったのだと思います。

教職に就いてからは、読書から得た感動や知識を国語の教材と結び付けながら教材研究を続けました。例えば、「平家物語」の授業では、琵琶法師に関連して小泉八雲の耳なし芳一の話をしたり、戦争に関する教材では、藤原ていの『流れる星は生きている』などノンフィクションの作品を紹介したりなどする

ことで、より一層教材に対する深みを増すことができました。教科書の背後にある広い世界と生徒たちをどう結び付けていけばよいか、生徒たちの知的好奇心を揺さぶりながら教材研究を楽しんでいました。

外国文学に出会ったのも小学生のころでした。『ナルニア国物語』や『メアリーポピンズ』『ドリトル先生航海記』、神秘的な挿絵に魅入られ作品の世界に浸り、シリーズを読みふけりました。今まで知らなかった外国の世界や空想の世界、豊かな想像力にあこがれました。読書によって自分の視野や思考の範囲がぐんと広がり想像力が鍛えられました。

本を読むということは孤独な作業です。しかし人間の深い情緒は孤独な時間から生まれます。文字をたどりながら作品の世界に入り込み、自分を顧みながら思考することで深い情緒が育まれます。すると相手の言動から気持ちを推し量ったり、様々な感情を感覚ではなく言葉で理解したりすることができてくるのです。本はいつてみれば人間力を磨くための栄養であるといえます。

亀井勝一郎氏の本にこんな文章があります。

「人生の最高の幸福とは読書である。何故なら、われわれは居ながらにして東西古今の賢者、偉人に接し、親しくその教へを聞くことが出来るからである。こんな贅沢なことはない。たとへ一日の三十分間でも書を読む習慣をつけ、併せて十五分間でも読書日記を毎日つけたらその人は一流の人間となるだらう。」（『亀井勝一郎全集 第十一巻』 p536 「読書七則」より、原文のまま）

図書館は、知の源泉である図書館資料を提供する場所であるとともに、生涯学習や読書の拠点となる場所でもあります。利用者の方々へ様々な企画やサービスの提供により、新たな本との出会いの機会が増えるよう努めてまいります。今後とも市立図書館へのご理解ご協力よろしくお願いたします。

## 高岡町で起こった心中事件が浄瑠璃に！

元高岡市立博物館長 晒谷 和子

### はじめに

高岡で唄い継がれる民謡「なきにがた」は、金沢城築城の時に唄われたと伝えられている。殿様は完成祝いに、建設に携わった職人達を招待した。宴席で各地の出し物を披露することになり、金沢の職人は謡曲を謡い、富山の職人は浄瑠璃を語った。けれども高岡の職人達は出しものがなく、千保川を川舟で荷物を運ぶ時に唄っている「なきにがた」を涙ながらに唄ったそうだ。この歌を殿様はたいそう喜んだ。「なきにがた」発祥の地は成美校下の木町だという。歌詞は「富山じょうりり 金沢うたい あいの高岡なきにがた」を始め多種ある。(『高岡の伝承』参考文献①)

私は45年前にこの話を聞いてから、江戸期の高岡には「なきにがた」の他に芸能がなかったと思込んでいた。ところが今年、高岡の浄瑠璃に関する史料3点から新たな真実を知った。

### 1 高岡を舞台にした浄瑠璃本があった！

今年の正月、私は20年前にコピーした『おりせ藤五郎くどき』②が、本棚の隅に眠っていることを突然思い出した。その粗筋を原文の言葉を交えながら記すと、

——高岡町にすむ清八という男が、江戸から「おりせ」という女を連れてきた。ところが高岡に住んでいるうち、おりせに藤五郎という思い人ができてしまった。二人の男の間で悩むおりせは、清八が江戸へ行っている間に、藤五郎と一緒に死んでほしいという。

辰の年、正月18日、おりせは旅籠町にある羽広屋(清八の家)を見てから、下川原町で藤五郎と落ち合った。時は午前4時、二人よりそい川原町一帯をそぞろ歩き、山町筋を通過して一番町を横にみて、坂を上って関野神社にお参りし、影無しの地蔵へとたどり着いた。おりせは、「この世ものちの世も助けたまえ」と地蔵を拜む。東の空が白む頃にはあの世へと、「早う殺してくだしゃんせ」との言葉に、藤五郎は泣きだして、おりせの胸を守り刀で刺し通し、

自分もその後を追った。——

粗筋では表せないが、心中に赴くおりせと藤五郎の切なく悲しい心情を、町々を歩く途上の景色を織り込んで実に哀れに表現している。

### 2 『おりせ藤五郎くどき』は実際にあった心中事件！

『おりせ藤五郎くどき』を読んでから、『蓬洲随筆卷之一』③によく似た話があったことを思いだした。著者の長崎玄庭(蓬洲)(1765~1827)は、高岡の一番町で代々町医を務める長崎家の養子となった蘭方医である。玄庭は実に筆まめに近隣の人々の暮らしを書き留めている。

〔文政三年庚辰、正月十八日〕に記載の箇所を現代文にすると、

「三番町の藤屋藤九郎は、旅籠町の羽広屋清八の妾と影無の処、地蔵堂の前で心中した。女は死に、藤九郎は死なず。藤九郎は翌十九日朝四時に命を落とした。清八は江戸へ行って留守だった。女は江戸で生まれた者である。

二・三日後に、御林地で芝居狂言となった。『おりせ藤五郎くどき』と『蓬洲随筆卷之一』を対比してみよう。

『おりせ藤五郎くどき』	『蓬洲随筆卷之一』
清八	⇒ 旅籠町の羽広屋清八
吾妻よりきたおりせ	⇒ 江戸出生の者。清八の妾
藤五郎	⇒ 三番町の藤屋藤九郎
辰の年 正月18日	⇒ 文政3年庚辰 正月18日

『おりせ藤五郎くどき』は浄瑠璃としての語りものだから、事実を明確に書く必要はない。わざと不明瞭な部分をだしながら、さも事実であると匂わせて、人々の関心を誘ったのではないか。しかし『蓬洲随筆』は日記なので、心中事件の年代が文政3年(1820)、干支が庚辰、正月18日、藤五郎は三番町の藤屋藤九郎、おりせは、旅籠町の羽広屋清八が江戸から連れてきた妾である事実を書いている。

これにより『おりせ藤五郎くどき』は、実際に高岡町で起きた心中事件をもとに創作されたことが、明らかになった。

「2・3日後に、御林地（御旅屋の西側に藩の林があった。現末広町辺り）④で芝居狂言となる」とあることから、当時の高岡に芝居を興行する人がいて、台本を書く人もいたのだろう。

町役人で俳諧誌『狐の茶袋』を編纂した寺崎蛸洲（1761～1822）による浄瑠璃本『月影御前謎物語』（守山城主神保安芸守の侍女の話）の一部分が『高岡史料下巻』⑧に掲載されており、台本作家の姿がおぼろげに見えてくる。

文化文政時代は江戸を中心として町人文化が花開き、浮世絵や滑稽本、歌舞伎などの全盛期だった。加賀藩内でも経済力のある高岡町へ伝播し、町民たちはこれらを楽しんだのだろう。

### 3 高岡で浄瑠璃を習っている若者がいた

さらに、高岡の定塚町で浄瑠璃を習う若者がいたことを記す古文書の存在が私の脳裏をよぎった。それは「窃盗に似寄りの事件に関する一件」〔安政2年(1855)〕（「御詮儀者一件控留」⑤所収）だ。その概要は――

定塚町、野村屋文左衛門の息子の久兵衛は22才。反物艶付け稼ぎをしている。少々、浄瑠璃を習い始めたところ、油銭（謝礼か）などに借銀ができた。

久兵衛は隣の貸家に住む縁者の善太郎が留守の間に、茶の間にあった着替えの<sup>あわせ</sup>袴1枚、<sup>ひとえ</sup>単物1枚、<sup>すずはいせん</sup>錫盃洗1つを無断で持ちだした。質入れし目途が立ったら返済して取り戻すつもりでいた。持主の善太郎が家に戻ると、それらがなくなっていたことに気がついて、大騒ぎとなった……云々と、久兵衛は肝煎（町役人）の甚次郎に供述している。――

そのなかで久兵衛は浄瑠璃を“<sup>じゅじやく</sup>懦弱の<sup>ゆげい</sup>遊芸”といい、肝煎の甚次郎も“久兵衛は常々懦弱の風にも見聞している”と述べていることから、浄瑠璃を習う者を“気持ちに張りのない弱々しくだらけた人”とする世間の捉え方が窺える。

高岡町会所はこの事件を、窃盗によく似た事件として、親預けにしたあと罪を許すという寛



『おりせ藤五郎くどき』表紙  
石川県立歴史博物館  
大鋸コレクション蔵



『蓬洲随筆卷之一』表紙

大な処分で済ませた。

この史料により、江戸末期、庶民には浄瑠璃を習う文化があったことが見えてきた。これで、高岡には「なきにがた」しかなかったという私の思い込みは完全に吹き飛んだ。

## 4 江戸期の町民文化

江戸中期になると庶民の生活が著しく向上し、町民でも富裕階級には読書講文の好みが芽生え文学に親しんだ。ことに漢詩が歓迎され、教養の高さを示すもの、文化人の資格であると考えられて持て囃された。『高岡市史中巻』⑥

町医者や町役人、大商人、僧侶、神主、職人など異業種の人々が集う詩亭を設け、外来の詩客なども来遊して詩会を催した。町医者の津島北溪(1813～62)は高岡の漢詩吟社に集う人々の逸話や詩などを『高岡詩話』⑦に纏めている。

俳諧は松尾芭蕉が高岡で宿泊した元禄以前から流行し、句集も多く遺される。これらに浄瑠璃や茶道、書道等も加わり、高岡の人々は文化的な暮らしを楽しんだと想像する。

### おわりに

中央図書館は、町会所にあった古文書に加えて旧家の貴重な歴史史料を保存している。平成4年度から古文書の活用・普及を図り『高岡市史料集』を発行し続け、今年度の3月で34集となる。古文書という玉を磨いて、江戸期の庶民の暮らしを再発見し、今を生きる私たちの生活をより豊かなものにできればと願っている。

**謝辞** この拙文を作成するにあたり、石川県立歴史博物館並びに太田久夫氏、明神博幸氏に大変お世話になりました。この紙面をかりて篤くお礼申し上げます。

### 参考文献

- ①『高岡の伝承』（高岡市児童文化協会編 1979年）
- ②『おりせ藤五郎くどき』（守川吉兵衛発行 1901年）
- ③『蓬洲随筆 卷之一』（長崎玄庭（蓬洲）著 1812～1820年 長崎家資料）
- ④「桜馬場両端並大仏前辺地境申分図」（KT199）
- ⑤『御詮儀者一件控留』（1853年・KT95）
- ⑥『高岡市史中巻』（高岡市発行 1963年）
- ⑦『高岡詩話（現代語訳）』（津島北溪著 篠島満訳 2005年）
- ⑧『高岡史料下巻』（高岡市編集・発行 1909年）

# ふるさと情報コーナー

## 高岡関係資料情報

令和2年度に発行された図書、雑誌及び新聞に掲載された高岡関係資料のうち、図書館で把握できた文献の一部を紹介いたします。配列はおおむね富山県郷土資料分類表に準じ、論題名・執筆者名（敬称略）・資料名・巻号数・出版年月の順に記載しました。

### 家持を伝える 歌い継がれ、語り継がれる越中の家持

- (中西進監修 高志の国文学館編 北日本新聞社刊 令和2年4月)
- 高岡市吉久伝統的建造物群保存対策調査報告書(再調査編) (高岡市教育委員会[編]刊 令和2年5月)
- 回想 新井雅夫さんを偲んで (太田久夫[編]刊 令和2年6月)
- とやま、祭り彩時季 1~11 (木原盛夫写真・文刊 令和2年7月)
- 景観からよむ日本の歴史 (金田章裕著 岩波書店刊 令和2年7月)
- 堀田善衛 対談・座談会・インタビュー等リスト (丸山珪一編刊 令和2年9月)
- 戸出を知る会三十年のあゆみ (戸出を知る会編刊 令和2年12月)
- 重要文化財勝興寺唐門ほか五棟(経堂・鼓堂・宝蔵・総門・式台門)修理工事報告書  
(文化財建造物保存技術協会編著 勝興寺刊 令和2年12月)

### 番屋のおんぞはんが語るさまのこのまちヨッサ

- (おかやまかん画・物語原文「番屋のおんぞはんが語るさまのこのまちヨッサ」制作実行委員会編  
吉久まちづくり推進協議会刊 令和3年1月)
- 町並み保存の記録 20 高岡市重要伝統的建造物群保存地区 (高岡市教育委員会[編]刊 令和3年3月)
- 高岡市史料集 第32集 長崎家資料より 逸見家文書より (高岡市立中央図書館編刊 令和3年3月)
- 高岡市万葉歴史館紀要 第31号 開館30周年記念号 (高岡市万葉歴史館編刊 令和3年3月)
- 山・鉾・屋台の祭り研究事典  
(植木行宣監修 福原敏男 西岡陽子 橋本章 村上忠喜編 思文閣出版刊 令和3年3月)
- 伏木港物語 開港の父、藤井能三 三菱の祖岩崎弥太郎に直談判 (北國文華 85号 令和2年9月)
- 鑄物・銅器の町と港町をつなぐ 万葉線(高岡軌道線) (旅の手帖 45巻3号 令和3年3月)
- 高岡の偉人・高峰讓吉 マルチな才能を発揮 多彩な分野に足跡(西部ふしぎ散歩)  
(北日本新聞 令和2年4月25日)
- 高岡の観音霊場一覧 瑞龍寺・まちの駅ネットワークがマップ作製 33ヵ所紹介「魅力再発見を」  
(北日本新聞 令和2年8月16日)
- 明治の小説家三島霜川(高岡出身) 直筆の小説原稿発見 関係者「非常に貴重」  
(北日本新聞 令和2年10月21日)
- 中田の歴史写真誌に 高岡・学校、図書館に配布 教育や災害、ジャンル別に解説 4年かけ4月刊行  
(富山新聞 令和3年3月30日)

富山県立図書館ホームページ「とやまの本」及び「県内記事情報検索」より

# ||||| 調査相談の窓口から |||||

…… おたずねくださいQ&A (福岡図書館) ……

福岡図書館に寄せられた質問の中から、郷土に関するものを紹介します。図書館業務の中ではあまり知られていないサービスですが、調べ物の補助を行うもので、資料を提示する形でお答えしています。ご利用お待ちしております。

## レファレンスの例

Q：岸渡川の源と川筋の変遷について知りたい。

A：「岸渡川」が「がんどがわ」と呼ばれるようになったのは、『福岡町史』では、明治中頃以降としている。それ以前は、「きしわたりがわ」と呼び、それ以前は「切田（きりた）川」と呼ばれていたとある。

切田川が岸渡川と名称を変えたことについては、『富山県の地名（日本歴史地名大系）』によれば、「天明3年（1783）加賀藩主前田しげみち重教の次女穎姫の通行の際に岸渡（きしわたり）川と改名（杉野家文書）」としている。その理由は、『福岡町史』によれば、「切の字は縁起が悪い」ということだったようである。また、名称を「岸渡」としたのは、「元和元年（1615）庄川出水時に、入川となり、橋の処が深瀬となって通行できなくなったので、深瀬に渡木を入れておき、その岸を人馬が通ったので「岸渡股」と唱えるようになった」ためのものである。

岸渡川の源について、『富山県の地名』では、『越中志徴』（加賀の史家森田柿園の明治期の著書）を引用し「庄川弁財天前はせの上より発し、水宮村（現砺波市）からは、用水・落水を集め中村川と称し、矢部村からは切田川と称した」とし、「古くは庄川の分流の一」と記している。

現在の岸渡川は、旧中村川の流域を含めているが、それは、『福岡町史』によれば、切田川を岸渡川と名称変更した頃からのようである。岸渡川の源については『西砺波郡紀要』や『東西砺波地方資料』においても、「源を林村に発し、若林、高波、正得、大滝、山王の諸村を経て福岡町に至り…(略)」と記載しており、『富山県の地名』では、岸渡川は、現在「庄川の若林口用水の一分流」であり、「砺波市日詰に発し、農業用水や落

水を集めて北流、小矢部市西端をかすめて福岡町に入り…略」と記載している。砺波市日詰は、昭和50年（1975）に日詰から林に地名を変更した集落である。『砺波市史資料編5 集落』で「日詰」を調べると「旧中村川右岸に位置する水田農村で西方を若林口用水が通る」と分かる。その集落史には昭和30年頃の概略図と平成7年（1995）の現況図が載っており、岸渡川と若林口用水の位置が確認できる。そのうえで『砺波市小矢部市住宅明細図』を確認したところ、砺波市林の深田団地付近で若林口用水から岸渡川へと流れる箇所が分かった。

「中村川」について、『富山県の地名』では、「近世初頭の庄川東遷以前、北西に流れていた庄川の旧分流の一つ」とし、「宝暦14年（1764）にはすでに諸所用水の落水が川になった程度の小流にすぎず、以後当川の名は諸記録から姿を消す。」と記載している。

また、「若林口用水」について『富山県の地名』では、「庄川東遷前の中村川筋を整備してつくられた用水」と記しており、『庄川合口用水史』では、約400年前の成立と推考されている。

川筋の変遷について、『福岡町史』には、井波町所蔵の古地図（推定慶長末年）を基に作成された「岸渡川・荒又川の河道変遷(図)」が載っており、元和元年（1615）庄川出水時に河道を変える前後と現河道を示す略図を掲載している。

## 提供資料

『福岡町史』、『西砺波郡紀要』、『東西砺波地方資料』、『砺波市史 資料編5』、『砺波市小矢部市住宅明細図 令和3年版』、『礪波郡村々組分絵図（複製）』、『語り継ぎたい昭和の福岡町』、『山王地区集落誌』他

(村本 雅美 記)



## こんにちは、高岡の地域図書館です！

4つの館の活動をシリーズで順に紹介します。3回目は、伏木図書館です。

伏木図書館は大正9年（1920）に射水郡伏木町立図書館として、旧伏木消防署の地に設置されたのが始まりです。昭和17年（1942）に高岡市へ編入されたことにより「高岡市立伏木図書館」と改称され、その後、幾度かの移転を経て、平成27年（2015）5月に新築された高岡市伏木コミュニティセンター内に移転し、現在に至ります。見晴らしの良いカウンター席が人気です。

### 富山に関する図書を集めたコーナー

伏木図書館では、富山に関する図書を集めた「ふるさとコーナー」、伏木出身の芥川賞作家「堀田善衛<sup>よしえ</sup>著作集コーナー」、海の関連本を集めた「海のコーナー」、万葉の関連本を集めた「万葉コーナー」、「藤子・F・不二雄コーナー」、「大活字本コーナー」などを設置しています。

また、富山新聞を昭和21年（1946）3月から永年保存しており、市内外からのご利用をいただいています。

### 地域との連携

伏木地区には、昭和33年（1958）に発足した「伏木読書会」があります。毎月第3土曜日に伏木コミュニティセンターで読書活動を行っています。伏木図書館では、テキストとして使用される県立図書館所蔵資料の仲介を行い、読書活動を支援しています。



伏木読書会

毎年10月下旬から11月上旬の「読書週間」の期間に合わせて、「雑誌等のリサイクル市」を行っています。図書館の除籍雑誌や利用者から提供いただいたご家庭の本を無償で提供しています。昨年度は、375冊をリサイクルしました。

### 学校との連携

中学生の職場体験活動「社会に学ぶ14歳の挑戦」では、伏木中学校の2年生2人を受け入れ、館内清掃・書架整理・排架作業・企画展示の準備など様々な業務を体験してもらいました。



14歳の挑戦

### 藤井能三等の企画展示コーナー

所蔵している藤井家文書等を活用した企画展示を行っています。藤井能三に関する貴重な資料は、伏木図書館初代館長の藤井陳三氏より寄託されたものです。

藤井能三は、日本海側で最初の西洋式灯台や測候所を自費で建設し、今日の伏木港の基礎を築いたほか、県内最初の公立小学校「伏木小学校」の設立など地域の公益事業に尽くしました。



（大江 菜穂子 記）

## 庄川との共存

庄川は、現在砺波市庄川町金屋から高岡市牧野方面へ流れる南北に連なる河川である。かつて本流は砺波市庄川町金屋から北西に向かって小矢部川と合流していたが、それが洪水のたびに本流が野尻川、中村川、千保川と変わりながら西から東へ移っていった経緯がある。現在の川筋に近づいたのは、天正13年（1585年）に発生した天正地震による影響が大きい。

庄川は、砺波平野に幾度もの甚大な洪水被害を引き起こした暴れ川であった。戸出区域も例外では無く、明和9年（1772年）の洪水では、戸出区域一帯が大きな被害を受けた。砺波平野や戸出地域の人々には、庄川と戦ってきた歴史がある。

しかしその一方で、庄川水系を利用し共存してきた歴史もある。今回は戸出地区と河川の関わりに触れる。

### 【河川を利用した舟運】

高岡市戸出地区では、大昔から明治初期にかけて物資を運搬する手段として舟運が利用された。これは、庄川のほか、千保川や祖父川といった中小規模の河川があったことによる。

千保川は、かつて庄川の本流として豊富な水量が流れる河川であった。しかし、加賀藩は千保川の氾濫を危惧して、承応2年（1653年）の柳瀬普請や寛文10年（1670年）の松川除など幾度かの大工事を実施し、現在の庄川へ流れを移す工事を実施した。

文政2年（1819年）、旧千保川の排川地を利用した舟戸口用水が開発された。この用水は、灌漑用水として利用すると共に、砺波地方と高岡間の物資交流の河川としての役目があった。砺波市庄川町金屋地域からは木材、高岡からは肥料、薪炭、雑貨等

を運送し、運送川と称せられる程の役目を果たしていた。また、御蔵米の運送にも利用された。当初、御蔵米は馬で戸出まで運送されていたが、舟戸口用水が開発された後は、この用水を利用して戸出まで運送された。

### 【生活を支えた水】

暴れ川として人々を悩ませた庄川であったが、同時に砺波平野に清らかな水をもたらし、砺波平野を潤してきた。

砺波平野は扇状地である。雨や河川の水はしみこんで伏流水となるため、庄川流域は地下水に恵まれてきた。現在のように水道が普及していなかった時代は、湧き水や井戸水は生活に欠かせず、人々は庄川の恩恵を享受していた。

戸出地区に大清水という地名がある。地名の由来は、この村に大きな清水が湧き出ていることにちなんで大清水と名付けたという。

### 【河川にまつわる伝説（玄貞川の大蛇）】

昔、ある人が夜遅く川渚を通ったところ、向う岸に大蛇が横たわっており、びっくりして命からがら帰ったという。それから、この川には大蛇が居ると伝えられている。

### <参考資料>

「河川の歴史読本 庄川」

「庄川」

「戸出町史」

「戸出400年のあゆみ」

「富山県の河川」

「中田町誌」

（櫻井 佑歩 記）

# お知らせ



## 行事予定(変更になる場合があります)

### 中央図書館

- えほんのじかん 毎週火～金曜日  
(休日を除く)  
午前11時～15分程度
- えほんの広場 毎週土、日曜日、休日  
午前11時～30分程度
- 土曜おはなし会 午後2時～2時30分
- 第1土曜日 高岡おはなしの会  
第2土曜日 図書館ボランティア  
第3土曜日 チルドレンズシアター  
(高岡第一学園  
幼稚園教諭・保育士養成所/年4回)
- 第4土曜日 人形劇団どんぐりコロコロ  
第5土曜日 劇団「喜び」
- 高岡婦人読書会 毎月第3水曜日 午後2時～  
「古文書を学ぶ会」 年4回開催  
午前10時～11時30分(受講受付締切ました)

### 伏木図書館

こども読み聞かせ会 毎週土曜日 午前11時～

### 戸出図書館

こども読み聞かせ会 毎週土曜日 午前11時～

### 中田図書館

子ども読み聞かせ会 毎週土曜日  
午前10時30分～

### 福岡図書館

おはなしの部屋(読み聞かせ等) 毎週土曜日  
午前11時～

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、上記の内容が中止・延期となる場合があります。  
最新の実施状況は、図書館のホームページを確認するか、お電話などでお問合せ下さい。

## 中央図書館の活動

### 〔古文書関係の事業〕

#### ○古文書解説事業

中央図書館所蔵の古文書を解説し、『高岡市史料集』として発刊します。

#### ○古文書を学ぶ会

中央図書館所蔵の古文書をテキストとして、近世の高岡の様子を学びます。今年度は、「越中出来船と役銀」をテーマに取り上げ、年4回開催します。

#### ○高岡市史料集解説講座

今年度は、11月19日(土)に開催予定。毎年3月発刊の『高岡市史料集』の解説文に基づき解説します。「市民と市政」11月号などをご覧ください。

### 「高岡の魅力発信

### デジタルアーカイブ事業」

中央図書館が所蔵する江戸期以降の郷土史を知るのに貴重な古文書をアーカイブ化し、ホームページ上に公開しました。アクセスし易くすることで、高岡の魅力を再発見し、次世代につなげます。

### 〔学校との連携事業〕

子どもの読書活動推進の一環として、高岡市内の小・中・義務教育学校、特別支援学校との連携を更に進め、次の事業を展開しています。

#### ①わくわくブックトーク

図書館職員とボランティア会員が小学校等を訪問し、低学年の児童を対象にブックトークを実施します。

#### ②図書館ツアー事業

児童を中央図書館に招待し、施設の機能や使い方について説明します。

#### ③ふるさと高岡巡回文庫

高岡ゆかりの人物の関連図書を小学校等に巡回させ、ふるさと高岡への愛着心を育みます。

#### ④学校における個人貸出

団体貸出に加え、児童や教員が学校図書館を通じて中央図書館の本を借りられます。

高岡市立中央図書館 〒933-0023 末広町1-7  
高岡市立伏木図書館 〒933-0104 伏木湊町13-1  
高岡市立戸出図書館 〒939-1104 戸出町3-19-29  
高岡市立中田図書館 〒939-1272 下麻生1108  
高岡市立福岡図書館 〒939-0132 福岡町大滝44

TEL (0766) 20-1818 FAX (0766) 20-1819  
TEL (0766) 44-0073 FAX (0766) 44-0073  
TEL (0766) 63-1254 FAX (0766) 63-1254  
TEL (0766) 36-0054 FAX (0766) 36-0054  
TEL (0766) 64-1034 FAX (0766) 64-1038